東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

関敬吾・石田英一郎と「世界昔ばなし文庫」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井,正己 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166620

東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　**72**: 147－162, 2021.

関敬吾・石田英一郎と「世界昔ばなし文庫」

＊石　井　正　己
（日本語学・日本文学分野）

二〇二〇年八月二四日受理

要旨：戦前・戦中の昔話研究は、国内の採集を優先する一方で、アジアに対して植民地支配と不可分に進められた一面があったと言わざるをえない。それに対して、戦後の昔話研究を国際的な視野で進めたのは関敬吾と石田英一郎である。彼らが協働作業として力を注いだのが「世界昔ばなし文庫」であった。しかし、このシリーズは子供向けの読み物であったためか、すっかり忘れられている。今、戦後の昔話研究が大きな壁にぶつかって停滞していることを思うとき、初志を貫く実践がなんだったのかを明らかにする必要がある。本稿はその一端を縷述したものである。

キーワード：関敬吾、石田英一郎、柳田国男、川端康成、「世界昔ばなし文庫」、『世界の昔ばなし』、『世界民話全集』、国際的な昔話研究、子供向けの読み物

一　戦後の国際的な昔話研究の出発

戦前・戦中の昔話研究は、柳田国男（一八七五～一九六二）を中心に進められた。『桃太郎の誕生』（三省堂、一九三三年）の評価が高いが、雑誌『昔話研究』の発刊を経てまとめられた著作はその陰に隠れてしまったところがある。一冊は歴史的研究を進めた『昔話と文学』（創元社、一九三八年）であり、もう一冊は珍しく国際的研究に踏み出した『昔話覚書』（三省堂、一九四三年）である。柳田の研究は戦後もそのまま継続され、さらに広い視野からまとめた『口承文芸史考』（中央公論社、一九四七年）では「神話」に言及している。それを踏まえてまとめたのが監修の『日本昔話名彙』（中央公論社、一九四八年）であり、これは発生論に立った最初の昔話のタイプ・インデックスとなった。

一方、そうした動きと交代するように戦後の昔話研究をリードしたのは、関敬吾（一八九九～一九九〇）であった。関は雑誌『昔話研究』の発刊に関わって、この世界にのめり込んでゆくが、当初から柳田の考え方とはずいぶん違った。国際的な比較研究を進めるために、国際的な指標になるＡＴ分類を尊重し、そうした視点から日本の昔話を見ていた。『日本昔話名彙』の整理を手伝う一方で、国際的な視野に立った日本の昔話のタイプ・インデックスを作成したいと考えていた。

関は労作の『日本昔話集成』全六巻（角川書店、一九五〇～一九五八年）を著し、日本の昔話を国際的に位置づけることを実現した。その結果、昔話のタ

＊　東京学芸大学　日本語・日本文学研究講座　日本語学・日本文学分野（一八四－八五〇一　東京都小金井市貫井北町四－一－一）

イプ・インデックスとしては、『日本昔話名彙』ではなく、『日本昔話集成』が使われることになる。その後しばらく昔話への関心を失った時期もあったようだが、録音技術の普及によって昔話集が増えると、『日本昔話集成』では物足りなくなる。そこで、野村純一（一九三五～二〇〇七）の力を借りて、『日本昔話大成』全一二巻（角川書店、一九七八～一九八〇年）を増補した。

こうして二〇世紀の歩みをたどるとき、どうも死角に入って見えなくなっていることがいくつかあるのではないかと考えてきた。その中でかねてから注意して買い集めてきたのが、関敬吾が石田英一郎（一九〇三～一九六八）と責任編集にあたった「世界昔ばなし文庫」（一九四七～一九五〇年）であった。それ以前は神話学者の松村武雄（一八八三～一九六九）が神話・伝説・童話を世界的に捉えようとした成果はあるものの、昔話研究は日本の採集に専念し、世界規模の出版は見られなかった。これは植民地支配を引きずりながらも、そこから脱却してゆく試みだったと思われる。

関と石田は、柳田が植民地支配から一定の距離を取りながら進めた昔話研究を評価しながらも、飽き足らないと感じていた点で一致していたにちがいない。まだ柳田は健在であったが、気骨のある二人はそのことに躊躇せず、戦後の昔話研究の基盤を作ろうとした。だが、二人の方法は対照的だったように思われる。同じ国際的な昔話研究と言っても、関は日本から世界を見ていたし、石田は世界から日本を見ていたように思われる。その後、石田は昔話研究から離れ、この分野では関が第一人者として尊崇されることになり、この緊張関係は見えなくなってしまった。

だが、今となってみれば、石田英一郎のようなタイプの研究者が育たなかったことは反省してみなければならない。そうした思いを込めてここに取り上げるのが、二人の協働作業であった「世界昔ばなし文庫」である。子供向けのシリーズであったためか、それぞれの業績としてまったくと言っていいほど評価されていない。しかし、戦後の昔話研究を考える際に特筆したい業績であることは間違いないので、本稿ではそのことをお伝えしたい。

二　「世界昔ばなし文庫」の挫折と継続

戦後の昔話研究の中ですっかり忘れられてしまった昔話集に、柳田国男・川端康成監修、関敬吾・石田英一郎責任編集「世界昔ばなし文庫」のシリーズがある。発行順に示してみると、次のようになる。

・石田英一郎編『火の鳥―ロシヤの昔話―』彰考書院、一九四八年一月二五日発行
・金田一京助・知里真志保共編『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』彰考書院、一九四八年四月二五日発行
・関敬吾編『山の神とほうき神―日本の昔話―』彰考書院、一九四八年六月一五日発行
・河田清史編『象とさるとバラモンと―インドの昔話―』彰考書院、一九四八年七月一〇日発行
・江尻英太郎編『ほら貝王子―タイの昔話―』彰考書院、一九四八年九月一五日発行
・服部四郎編『金と銀のさいころ―アルタイ系諸族の昔話―』彰考書院、一九四八年一一月二五日発行
・小川亮作・河崎珪一共編『金の燭台―イラン・アフガニスタンの昔話―』彰考書院、一九四八年一一月二五日発行

＊

・石田英一郎著『うたう木の葉―デンマーク童話集―』福村書店、一九五〇年一月一〇日発行

この「世界昔ばなし文庫」は、東京都千代田区神田小川町の彰考書院を発行所として刊行が始まった。彰考書院は雑誌『民族学研究』の発行を引き受けるなどしているので、関と石田には縁故があり、それで発行を頼んだにちがいない。『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』までは直江広治（一九一七～一九九四）が責任編集者に名前を連ねていた。

七冊目となった『金の燭台―イラン・アフガニスタンの昔話―』の巻末の広告には、やはり、「○子供のためには最も良心的な娯楽と教養の糧」「○大人のためにも有益な高い学芸の香り」「○世界諸民族の特性・人類文化交流の

歴史を民間に伝えられた「耳の文学」からまなぶ」と、この文庫の趣旨を説明する。

その後には、既刊書七冊に加えて、「近刊」として「石田英一郎　うたう木の葉（スウエデーン・デンマーク）」「佐藤誠　風の悪魔（トルコ）」の二冊を挙げる。さらに続刊予定の、「田中於菟弥（古代インド）・山宮允（アイルランド）・小林高四郎（モンゴル）・魚返善雄（中国一）・直江広治（中国二）・関敬吾（朝鮮）・松本信広（東南アジヤ）・山本達郎（安南）・光吉夏弥（ノールウェイ）・会田由（スペイン）」の一〇冊が見える。「世界昔ばなし文庫」の名称にふさわしいシリーズを予定していたと言っていい。

しかし、彰考書院は廃業したらしく、シリーズはこの七冊で頓挫してしまった。その後を受けて発行所になったのは、東京都文京区真砂町の福村書店であった。「近刊」とされた石田英一郎著『うたう木の葉―デンマーク童話集―』が一年半後に発行されている。『うたう木の葉―デンマーク童話集―』は彰考書院で制作が進み、すでに原稿ができていたのかもしれない。

この時期、福村書店は、河田清史訳編『太陽の東・月の西―ノールウェイ童話―』（一九四九年）、吉田行範訳『拇指小僧―ペロオ童話集―』（一九四九年）、河田清史著『シンドバットの冒険―童話アラビアンナイト―』（一九五〇年）、河田清史著『ラーマーヤナ―印度古典童話―』（一九五〇年）、平野威馬雄訳『お猿の裁判官―ラ・フォンテーヌ童話集―』（一九五〇年）のような、「童話」を副題にした読み物を出していたので、『うたう木の葉―デンマーク童話集―』はそうした中で発行された。『うたう木の葉―デンマーク童話集―』のカバー裏には「福村児童文庫」とあり、装幀の一致から見ても、そのことは明白である。

石田英一郎著
『うたう木の葉
―デンマーク童話集―』のカバー

しかし、石田は「世界昔ばなし文庫」という言葉を本扉や奥付に残し、巻末には「監修者のことば」まで入れて、継続であることを示した。しかし、「デンマーク童話集」の命名は、厳密に言えば、「世界昔ばなし文庫」の用語と齟齬を来している。「世界昔ばなし文庫」は民俗学や民族学の伝統を受けて企画されたが、福村書店では「福村児童文庫」を名のるように、そうした認識は薄く、単純に児童書の中に位置づけようとした。結局、「世界昔ばなし文庫」はこれで終わってしまった。

三　柳田国男・川端康成の「監修のことば」

この「世界昔ばなし文庫」は、巻頭または巻末（再版以降および一部の初版）に、監修者の柳田国男・川端康成の連名からなる「監修者のことば」が掲載されている。柳田はともかく、小説家の川端が名前を連ねている理由は、広い読者の獲得ということが考えられたのかもしれないが、よくわからない。そうしたことがあるにしても、このシリーズを貫く思想が示されていると思われるので、ここにそのまま引用しておく。

監修者のことば

あなた方は、これまでたくさんのお話を聞いたり、読んだりしたことがありましよう。そのなかにはある作者が筆をとつて書いたものもありますが、また遠い昔から誰がいつどこで作つたかわからないで、語りつたえられている昔ばなしも少くありません。

昔ばなしにはその国ぐにのならわしや、生活のありさまや、考えかたや、信仰が、いろいろの形でおりこまれております。そのうえはるか時をへだて、遠く土地を異にして、全く同じ話や似かよつた話のあることも、あなた方はもう気がついていることでしよう。これはいつたいどうしたわけでしようか。遠くはなれた国ぐにの昔ばなしが、たがいに一致しているということは、人間の文化を考えるうえに、政治や戦争の歴史にもまして、大きな問題であります。

「世界昔ばなし文庫」は、そういう意味で、それぞれの国の文化をしら

べていられる専門の学者にたのんで、とくに子供たちに親しまれ、また特色のある昔ばなしを選んでもらいました。あなた方は、昔ばなしが意味の深いたいせつなものだということを知つて、いくたびも読みかえし、その中に語られていることがらを、ふり返つて考えて下さい。いろいろの民族の生活を研究するうえに、また世界の人類の遠い昔の交通や歴史をまなぶうえに、役に立つ材料となるかと思います。

本のおしまいの「解説」は、少し、むづかしいかも知れませんが、大きくなつて、昔ばなしの研究に興味をもつたときの、手がかりになるかと思つてつけておきました。

私たちは、将来、あなた方の中から、今まで知られなかつた人類の歴史をきわめようとする人が、一人でも多く世に出ることを、心からのぞんでおります。

監修者　柳田国男
川端康成
編集責任者　関敬吾　石田英一郎　直江広治

このうち、「昔ばなしにはその国ぐにのならわしや、生活のありさまや、考えかたや、信仰が、いろいろの形でおりこまれております」というのは、民俗学の思想であろう。しかし、「そのうえはるか時をへだて、遠く土地を異にして、全く同じ話や似かよつた話のあることも、あなた方はもう気がついていることでしょう」というのは、それを超える文化人類学・民族学の思想である。しかも、「遠くはなれた国ぐにの昔ばなしが、たがいに一致しているということは、人間の文化を考えるうえに、政治や戦争の歴史にもまして、大きな問題であります」には、戦後の文化人類学・民族学のあり方が示されている。「いろいろの民族の生活を研究するうえに、また世界の人類の遠い昔の交通や歴史をまなぶうえに、役に立つ材料となるかと思います」になれば、もはや民俗学から離れて、文化人類学・民族学そのものと言っていい。こうした文章は、川端はもちろん、柳田が書いたとは考えにくく、むしろ、編集責任者三人の意志が感じられる。代筆した可能性が高いと思われる。

注意されるのは、「それぞれの国の文化をしらべていられる専門の学者にたのんで」とある一節ではないか。この「世界昔ばなし文庫」は「子供たち」を読者に想定し、「今まで知られなかつた人類の歴史をきわめようとする人が、一人でも多く世に出ること」を希望していた。だが、児童文学作家を使わず、当該地域を専門とする「専門の学者」に依頼したのである。これは画期的なことだったと言っていい。

実際、石田が文化人類学者・民族学者、関が民俗学者・民族学者、直江が民俗学者・中国学者であるばかりではなかった。金田一京助（一八八二～一九七一）、知里真志保（一九〇九～一九六一）、江尻英太郎（生没年不明）、服部四郎（一九〇八～一九九五）は言語学者であり、河田清史（一九〇九～一九九一）、小川亮作（一九一〇～一九五一）は翻訳家であった。なお不明なのは河崎珪一（生没年不明）だけである。こうした人選を見るならば、子供向きの読み物であったが、手を抜かないシリーズだったということができる。

だが、一冊ずつ見てゆくと、それぞれの編集方針はずいぶん違っていることが知られる。単一のシリーズから翻訳したのではないので、むしろ、そうした違いが生じるのは当然である。地域の個性もあり、また編者の昔話に対する関心もかなり違っている。そうした違いは歴史的に見て注意されるだけでなく、今日の昔話研究を考え直すためにも意義を持つように思われる。そこで、この八冊を順に取り上げて、その特色を捉えてゆくことにする。

四　世界的視野と国際的協力へ進むために――『火の鳥』

この石田英一郎編『火の鳥―ロシヤの昔話―』は、一九四八年一月に初版、一九四八年九月に再版、一一月に三版が出て、よく読まれた。この初版だけはハードカバーであった。

石田は「はしがき」で、ソ連の「世界の大国の一つ」であるとする状況と歴史を解説し、ロシヤ人がヨーロッパで最もアジヤの諸民族と深い関係があることを述べる。その上で、ロシヤの文豪だけでなく、「ロシヤの民族がうみだした、飾りけのない新鮮な、この口と耳の文芸は、世界の国々の中で、もつとも高い水準にたつしています」と評価する。

そして、「彼らは、北の国の、暗いきびしい大自然のふところに生れました。

その上ながい間、ひどい専制政治のもとに、自由をうばわれ、苦しい生活をしのんできました。無邪気でしんぼう強いことは、よく知られていますが、のんびりしているようではげしい性質をもち、あらあらしい一面、やさしい人情ももつています。私たちも、この複雑な民族が、アメリカ人とならんで、これからの世界を動かす、大きな力となつていることを、忘れてはなりません」と結んだ。第二次世界大戦後の東西冷戦の構造を視野に入れ、この昔話集を編集しているのである。

本書は、次のように構成されている。

監修者のことば　柳田国男・川端康成
はしがき　石田英一郎
1　宝の壺
2　魔女（ババ・ヤガー）
3　小指太郎
4　水蛇
5　海の王と賢いヴァシリーサ
6　黄金（きん）の靴
7　慾の深い坊さん
8　三人兄弟
9　魔法にしばられた王女
10　死人の話
11　馬鹿と白樺
12　火の鳥
解説
後記

驚くのは、末尾の「解説」と「後記」である。「はしがき」は子供向きの概説になっていたが、末尾の二つはまったく研究者向きの文章であると言っていい。「解説」は「以下の解説の中にはさんだ参考資料の横文字や数字は、現在まだ大部分の読者には不必要なものかも知れません。どうかとばして読んでいつて下さい。しかしいまにわが国の昔ばなし研究が、世界的視野と国際的な協力との方向にむかうにしたがい、必ずひろく役にたつ日の来ることを、私は信じ、かつ希望しています」とし、一二話について惜しみない解説を述べている。

石田の気概は「解説」のどこを引いてもよく示されているが、「3　小指太郎」ではこんなふうに述べている。

これはフランスのPetit Poucetやイギリスの**Hop-o-my-thumb**と同型の、全ヨーロッパ諸国の子供たちにもつとも親しみぶかい拇指（おやゆび）太郎と人喰鬼の話の、白ロシヤにつたわる一例である。人喰鬼の子供たちとベッドを入れかわつたり、寝間帽をとりかえたりして、自分の子供を喰べさせてしまう話も、鬼の七里長靴をうばつて逃げる点も、各国に共通している。ただロシヤの農奴の陰惨な生活苦や、地主と農奴とのある関係など、多少この物語の中からうかがうことができるが、この生活苦を脱して楽な暮しにはいる夢が、小指太郎の智慧と力とによつて実現されることは、その底になにか古い意味があつたものかもしれない。日本の小サ子説話では、桃太郎にせよ、一寸法師にせよ、爺婆に福徳をもたらす小童が、もともと水の世界から人界につかわされた神霊であつたらしいことが、柳田先生などの研究により、無数の民間の伝承からしだいに証明されてくるようになつた。西洋の小サ子談には、わが国ほど豊富に古い世の信仰の跡をとどめたものは見出せないであろうが、将来こうした東洋の資料との比較研究から、もし今までの学者の気づかなかつた新しい解釈のみちが開けてくるようなことにでもなれば面白いと思う。

「後記」では、「この国の民衆の古来の伝承としてもつとも典型的とおもわれると同時に、また国際的な比較研究の上にも大きな問題を投げあたえるもの十二種をえらびだした」と述べたが、その意図はこの記述にもよく表れている。すでに『一寸法師』（アテネ文庫、一九四八年）の構想が用意されていることもうかがい知ることができる。

五　北海道と樺太のアイヌの昔話の筆録――『りくんべつの翁』

金田一京助・知里真志保共編『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』は、一九四八年四月に初版、一一月に再版が出て、これもよく読まれた。表紙が変わり、口絵がなくなり、「監修者のことば」が巻頭から巻末に動いている。こうしたこの文庫の改版は注意されるが、詳細はつかめていない。小さな問題だが、そのために表紙とその解説に齟齬が生じていることだけ指摘しておく。

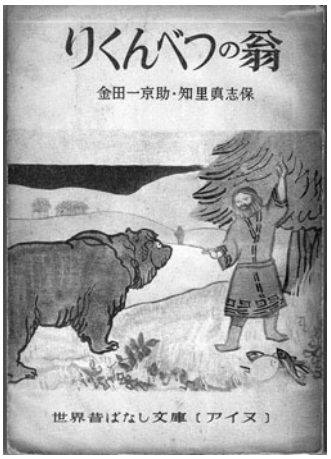
金田一の「はしがき」は、アイヌの生活や身体・歴史を述べ、その同化政策について、「今のアイヌの人たちは、「われわれも日本人だ。日本人として笑われないようにならなければいけない」という心持になつて、ふるい習慣は思いきつてすてて、もう今日は、衣食住とも、私どもとなんの異る所もないまでになつたところです」、「それですから、今日の幼い人びとの中には、もうアイヌ語をつかう人など一人もありません」などと解説するのは、今となってみれば改めなければならない認識であると言っておきたい。

今、初版で構成を示すと、次のようになる。

監修者のことば　柳田国男・川端康成
はしがき　金田一京助
上篇　北海道の部　金田一京助
1　りくんべつの翁
2　上の太郎・下の太郎
3　雲井の神
4　鬼鹿毛（おにかげ）
5　山男の宝
6　流れて来た子供
7　島流し
8　金色の大鳥
9　六年養われた熊の話
10　黄金（こがね）の首飾
下篇　樺太の部　知里真志保
1　ルルパの首領
2　上の者・下の者
3　山姥嫁入
4　サンナイペツの首領
5　サヌィペシのきようだい
6　流れてきた母神
解説

金田一京助・知里真志保共編
『りくんべつの翁
―アイヌの昔話―』初版

柳田国男・川端康成「監修者のことば」の裏頁に、「表紙カットは、熊祭の熊の頭骨をイナウ（削りばな）で飾つた木　イクサパオマニ」とあり、表紙のデザインを説明する。



金田一京助・知里真志保共編
『りくんべつの翁
―アイヌの昔話―』再版

本扉の裏頁に、「表紙カットは、熊祭の熊の頭骨をイナウ（削りばな）で飾つた木　イクサパオマニ」とあるが、表紙のデザインと対応していない。

「上篇　北海道の部」は金田一、「下篇　樺太の部」は知里の分担になっている。しかし、「解説」には「知里君の原註に」のような記述が見られるので、知里が金田一に原稿を渡し、金田一がこれを整理した可能性が高い。「解説」は無記名だが、おそらく金田一が一人で書いている。

そうしたことはあったにしても、知里は樺太アイヌ語を知るために樺太の女

学校の先生をしたことがあり、金田一は北海道の集落を訪ね、東京にアイヌを呼んで話を聞いたことがあり、それぞれの経験がこの本には生かされた。それは、「1　りくんべつの翁」に「〔大正十四年八月沙流のコポアヌ媼（当時六十六歳）より杉並、成宗三三二の自宅にて筆録〕」とあり、「1　ルルパの首領」に「〔昭和十六年八月、タラントマリに於て、西田ルサさん（五十七歳）の口述、知里筆録〕」とあるのに端的に示されている。『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』はすべて編者の聞き書きを日本語にしたものであった。

そうしたこともあってか、「解説」はその内容や言葉に及ぶ。例えば、知里の「1　ルルパの首領」は次のようになっている。

> 鯱は、吾々の間には、「鯱銛立ち」、天主閣の上の「鯱銛」ぐらいにしか用のない名になつているが、海に棲む哺乳類で、群を成す時は、鯨を殺すという強猛なものらしく、アイヌではレプンカムイ即ち「沖の神」として崇拝され、陸上のキムンカムイ即ち「山の神」の熊と相対するやかましいものである。従つて、ユーカラ・オイナ・昔ばなしには、毎度出て来、家によつては、又部落によつては、殆んどトーテムのようにもなつていて、紋章にもなつている。器物の裏面によく見るト字に似た彫刻は、その単純化された図案である。背鰭が高く海の水面に出て、矢のように早く行く、その背鰭を立てた形がそれである。大抵は、人間を守る談が多いのであるが、ここにあげた談には、たまたまこの神のいたずらが物語られている。
>
> 「筋子のスープ」　原語はホマ・ウセイで、ホマは「筋子」、ウセイは「湯」である。知里君の原註に、「乾燥鮭卵のスープで、魔性の者に、正体を露わさせる力があるものと信じられているもの」とある。それで、今ここで急につくらせることになつたのであろう。
>
> 「ウカラ」ukarは、「相撃」の義。昔の本には「しゅつ打ち」と出ている。しゅつとは、ウカラに用いる棍棒shutuのことで、体操用の棍棒ほどのもので、先に筋金を入れたり、イボイボをつけたり、これで打たれたら……と戦慄させるようなものが、昔はあつた。武器であつたからである。平時にも、刑罰に用いられ、又決闘にも使われた。ここは、どつちが正しいかを決定する試合である。「正しいのが勝つ」「勝つのが正しい」のであつた。それで正邪がわからない時に勝負できめるというのがアイヌ文学に見るいつもの例である。

北海道の「2　上の太郎・下の太郎」と樺太の「2　上の者・下の者」は比較を意識して併載している。だが、国際的な比較研究に対する認識よりは、アイヌの言語や思考に関する解説が大半になっている。

六　変らない昔話の型から見た日本――『山の神とほうき神』

関敬吾編『山の神とほうき神―日本の昔話―』は、一九四八年六月に初版、一一月に再版が出て、これもよく読まれた。改版によって、装幀の上では『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』と同様の変化があった。

関は「はしがき」で、「沢山の昔ばなしを集めて、似かようたものを比較して見ると、何れにも共通した変らない部分があります。これは話の根幹ともいうべきもので、話の数はおびただしいものでありますが、この変らない昔ばなしの型はわずかしかありません。外国の学者が世界中の昔ばなしを集めて研究したものを見ますと、この変らないもとの型というものが七百五十ほどあります。我が国ではまだはつきりしたことはいえませんが五百ぐらいはあるかも知れません。そうしてこのうちの何割かは外国のものと共通しております。これがもとになつて国々で、いろいろ変化しているわけです」と述べている。ここには、「変らない昔ばなしの型」という概念が示される。「五百ぐらい」という数まで出ているので、すでに『日本昔話集成』が用意されていたと知られる。

今、初版で構成を示すと、次のようになる。

監修者のことば　柳田国男・川端康成
はしがき　著者しるす
1　灰坊
2　うぐいすの一文銭
3　旅人馬
4　寅千代丸

5　山の神とほうき神
6　姉と弟
7　馬喰やそ八
8　焼餅爺さま
9　起上り小法師
10　こんび太郎
11　魚の玉
12　鯉の報恩
13　鬼が笑う
14　金の茄子
15　おとん女郎
16　紅皿とかげ皿
17　骸骨の歌
18　豆助
19　灰まき童子
20　あくと太郎
解説

これは子供向けの読み物ということがあるので、それぞれの話の出典は示されず、例えば、「12　鯉の報恩」の末尾には「――新潟県南魚沼郡――」とあるだけである。「解説」は次のようにある。

12　鯉の報恩　これは動物報恩譚ですが、これにもいろいろな形式があります。その一つの形式は曾て助けられた動物が、女に化けて来て恩を報ずるという話です。「うぐいすの一文銭」のところでも一寸書きましたが、鶴または山鳥或は鴨の報恩で自分の羽を抜いて機を織つてそれを売つて恩を報ずる話。あるいは葛の葉などと呼ばれ狐（ママ）の報恩譚。蛇女房、蛙女房、蛤女房などがあります。昔ばなしは本来、いわゆるハッピー・エンドに終るのが普通ですが、この形式の話は大抵は先にもいつたように化けた動物の正体を発見して、結末は不幸に終るものが多い。中には間接に恩を報ずるものもあります。例えば狐女房では稲の成熟を見守つてくれ、蛇女房の場合には地震などの災害を予め知らせ、難を逃がれさせるものもあります。これと同じく鯉を助けた男が恩を受けるという話が、朝鮮民譚集にも二つほど出ています。その一つは「放鯉得龍女」といい、鯉の報恩とはやや異なり、浦島太郎と同じ形式になつております。いま一つは「鯉と貧しき男」という題で、後半はここにあげた話とは違つて子供が三人生れるが、女が日に一二回ずつ水浴するのを、男は不思議に思つてのぞくと鯉だつたので、遂に破局となるのです。これは鶴女房や蛇女房と同じ形式です。

実は、この話の出典は、渡辺行一「南魚沼郡昔話」（『昔話研究』第七号、一九三五年）の「一　鯉の恩返し」であった。関は「解説」の末尾で「ここに集めた話は出来るだけ語られるままを保存するようにつとめました」と付記した。だが、出典の冒頭「昔、ある処にあつたてがんだ。貧乏の婆とアンニヤ（兄）が居たてんが。兄にやは毎日々々縄のて街へ持つて行つて、それを売つて米らの味噌らの買うて食ふやうの貧乏んのらと」は、「むかし、あるところにあつたそうな。貧乏な婆さまと若者とがあつたそうな。若者はまい日まい日縄をなつて、それを町へもつていつて、売り歩いて米だの味噌だの買うて食うような貧乏だつたそうな」とされている。「出来るだけ語られるままを保存する」とはいうが、今となって見れば、やはりわかりやすい共通語化が図られていると見るべきだろう。

おもしろいのは、「13　鬼が笑う」の「解説」に、「これは文献からたどり得る歴史もかなり古く、また分布も世界的です。『火の鳥』の中の「魔女」の話もこの昔ばなしの一種です」とあることだろう。これは先の石田英一郎編『火の鳥―ロシヤの昔話―』の「2　魔女（ババ・ヤガー）」との類似を示唆している。関は「世界昔ばなし文庫」を体系的に捉えて、「解説」を書いているのである。

七　イギリス人による昔話の調査研究――『象とさるとバラモンと』

河田清史編『象とさるとバラモンと―インドの昔話―』は、一九四八年七月

に初版、一一月に再版が出て、これもよく読まれた。改版によって、装幀の上では『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』と同様の変化があった。

河田は「まえがき」で、インドの地理や歴史を述べ、無数の民族が存在するので、一地方一種族の昔話を調べるだけでも大変だとする。だが、「幸いなことに、インド植民地を三百年にわたつて経営したイギリスは、さすがであります。イギリス人の手によつて、インド全土の百般の方面にわたる調査研究というものは、実に行きとどいた立派なものでありますが、昔話の方面でも約百年ほどまえから、さまざまな地方のさまざまな昔話がしらべられ、研究され、貴重な本となつてのこつています。一地方の一種族の昔話に一生をささげるといつたような学者が、いく人もあらわれるようになりました。それにつれて、インド人の多くの学者も協力しました。これらの人びとの貴い努力によつて、各地方々々の昔話について、たくさんの貴い本がのこされています。これら英語の本のおかけで、今日のわたしたちは、やつかいなインド全土の昔話のあらましを知ることが出来るようになりました」と述べる。これは、インドの昔話集の発行状況を的確に捉えた上で、この本が編まれたことを証明する。

やはり初版で構成を示すと、次のようになる。

監修者のことば　柳田国男・川端康成
まえがき　河田清史
Ⅰ　南部地方
第一話　さるとドラ
第二話　乞食とカステラまんじゅう
第三話　易者の息子ガンガダーラ
Ⅱ　東北部地方
第四話　サバイ草
第五話　象とあり
第六話　猿少年
第七話　夢みる男
第八話　思いもかけず金持になつたバラモン
第九話　四つのなぞ
第十話　象の征服者ハチ・シン
Ⅲ　西北部地方
第十一話　名君ハータム
第十二話　ご機嫌なおつた不平男
第十三話　かたい同盟
第十四話　ハーヤ・バンドとズーラ・コオタン
解説

「目次」にはⅠ・Ⅱ・Ⅲとしかないが、「解説」によって補足した。河田は五〇〇話ほどの話からこの一四話を選んだが、インドの自然・歴史・人種から三地方に分けるのがいいとした。Ⅰはマドラス・ボンベイ・マイゾール・セイロン・ハイダラバード・中央などの各州からなる南部地方、Ⅱはベンガル・ビハール・アッサム・連合の各州からなる東北部地方、Ⅲはカシミール・パンジャブ・ラジプタナ・シンドの各州からなる西北部地方である。それらの地方について概説した上で、各話の特色を述べる。例えば、南部地方の「第一話　さるとドラ」は次のようになっている。

第一話　さるとドラ――きわめて無邪気なれいろうなこの話は、南インドのあかるさを、人のこころの明るさをしめしていますが、このようにちよつとずるいことをして、次から次へといろいろないい品物にかえて行く話は、ただ南インドばかりとはかぎりません。

ずるい取引の話は各地方でちよい、ちよいみかけますが、いずれも主人がさるではなく、鼠にかわつています。そして最初はきまつて、尻っぽに棘をさしたことからはじまるのですが、次々と交換していく品物はけつして同じではありません。東北部（ママ）のパンジャブ州のこの種の話は、「さるとドラ」のさるよりもはるかにずるい鼠が主人公で、次々と品物を交換していく方法も、なかなか念のいつた複雑な悪いもので、最後に王女を妻にするところまで進みますが、策にたおれてわれ知らず焼け死んでしまいます。ずるさも悪どく、筋もくどく、結末は陰惨であります。

とうてい、「さるとドラ」の南部の純一なあかるさにかないません。

こうして南部地方の「さるとドラ」を採録した理由が明かされる。「解説」の最後には「一番参考になつた本の名前」が七冊挙げられている。すべて英語の文献である。

八　生まれ育ったシャムの昔話を書く喜び――『ほら貝王子』

江尻英太郎編『ほら貝王子―タイの昔話―』は、一九四八年九月に初版、一一月に再版が出て、これもよく読まれた。改版によって、装幀の上では『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』と同様の変化があったと思われるが、十分な確認ができていない。一九四八年一一月に、続く服部四郎編『金と銀のさいころ―アルタイ系諸族の昔話―』と小川亮作・河崎珪一共編『金の燭台―イラン・アフガニスタンの昔話―』と合わせて、それまでのものを重版して一括販売したと思われる。

江尻の「序文」には、シャム（またはタイ）を説明するにあたって、まず「こんどわたくしの書いたこの本が、皆さんに読んでいただけると思うと、わたくしはたいそううれしいのです。というのは、わたくしはシャムで生れ、シャムの首府バンコック市で育ち、シャムの学校を出たのです。わたくしはシャムの本や、シャムの人たちからたくさんの昔話を読んだり、聞いたりしました。いま、わたくしが知つているシャムの昔話の中から、日本の皆さんが喜びそうな話をえらんで、ここに書きました。皆さんが珍らしい話だなと喜んで下さることを思うと、うれしくてしかたないのです」と述べた。

江尻がどうした理由でタイで生まれ育ったのかはわからないが、その環境の中で幼いときから実際に昔話を聞いたり、本の昔話を読んだりしてきたのである。タイ語はかなり得意だったらしく、『タイ語文典』（大八洲出版、一九四四年）の著書もあったので、戦中から戦後にかけて、タイ通として知られていたにちがいない。そうした意味では特殊な書き手だったと言ってもいい。

やはり初版で構成を示すと、次のようになる。

監修者のことば　柳田国男・川端康成

序文著者
1　キンノン姫と王子
2　隠者と小姓
3　夢の話
4　十二人の姉妹
5　隠者と虎
6　龍王と猟師
7　人間と動物の知恵くらべ
8　アイカロクものがたり
9　ほら貝王子
解説

「解説」には「シャム人とラオ人は、タイ族という大きな民族の一つです。シャムの国をタイ国ともいうのは、この民族の名から来ているわけです」とあるが、植民地の問題が残っているので、今日のタイ国とは微妙に異なる。各話末にはその微妙な差異に基づいて、1・6・8がシャム・シャン、2がラオス、3・7が仏印タイ族、4がタイ族共通の昔話、5・9がシャムとある。「解説」でも、例えば、「1　キンノン姫と王子」は次のようになっている。

第一話の「**キンノン姫と王子**」の話は、ひろくタイ族の間に言い伝えられていて、ビルマのシャンでも、仏印のラオスでも、シャム国内のラオス地方でも、多少なかみはちがいますが、見出されます。これは、日本の羽衣伝説に大そう似ていて、中国と同じように、羽衣の天女は、鳥の一種になつています。キンノンは女にかぎらず、男のキンノンもおり、からだが人間で、腰から足が鳥の形をした天鳥であります。

ほかのタイ族の間に伝わつている話は、王子と結婚してからは、天鳥は天に戻ることをあきらめて、王子と幸福にくらすという所で終つていますが、シャムのシャン人の間で話されるものは、その続きがあり、王子が天鳥を追つて天国に行くまでの冒険がつけ加えられています。これは、明きらかに、パンヤサチャドクを書いた坊さんがかつてにつけ加えた部分であ

ろうと思われます。

この話で見られるように、タイ族の人々はなにをするのにも、占いをして運勢がいいかわるいかを見てからするという風習があります。いまでも、お葬式をするにも、縁起の良い日を占いでえらぶならわしがあります。

前にいったように、だいじな祭典の儀式はバラモン教のやり方でいたします。たとえば、出産祝、元服式、宮中の儀式、種まき祭、豊作祭などがこれです。

なお、この話の前半は純粋のタイ族のもので、後半はアラビアン・ナイトのシンドバドの冒険を想い出させるところがあり、これは仏教を通じて印度の影響があるのではないかと思われます。

九　言語学の専攻者が書いたアルタイ系語族の昔話
――『金と銀のさいころ』

服部四郎編『金と銀のさいころ―アルタイ系諸族の昔話―』は、次の小川亮作・河崎珪一共編『金の燭台―イラン・アフガニスタンの昔話―』と同じ一九四八年一一月に発行された。再版は確認できていない。

服部は「まえがき」で、耳慣れない「アルタイ語族」は西の方からチュルク語、蒙古語、トゥングース語に分かれ、「日本語に似た点が多い」ことを指摘し、そうした人々の間に伝わる昔話について書いたとする。その中には「自分で集めたもの」と「外国の学者などの集めたもの」があるとし、小川亮作と金田一春彦の協力があったことも述べる。

初版で構成を示すと、次のようになる。

まえがき　服部四郎
1　ワッチルの冒険
2　力持ちの小人
3　白鳥と鴉
4　狐の皮とお婆さん
5　鴉が肉を食べるわけ
6　悪狐のいたずら
7　欲ばりのカルンバイと頓智者のアルダルコシ
8　三人兄弟
9　山男とお爺さん
10　蒙古の昔ばなし
（イ）鼠の怪我
（ロ）フルンショボーという鳥の瘤
（ハ）男の子と魔物
（ニ）お爺さんをねらう虎と狐
（ホ）拾いぐいをした狐と狼
（ヘ）乾草と卵とあぶら肉
（ト）二人の坊さん
（チ）金と銀のさいころ
（リ）愚かな王子と賢い娘
解説
附記
監修者のことば　柳田国男・川端康成

話末には話を伝えた人が、1はカルムイク、2・3はトゥングース、4・5・6はドルガン、7はカザッフ、8はウズベック、9はノガイ、10は無記載だが、蒙古ということになる。

「解説」は次のように始まる。

この本に紹介した昔ばなしについても、おなじ叢書の「火の鳥」という本の中で、石田英一郎さんが試みられたような比較研究や民俗学的な研究ができます。しかし、私は言語学を専攻とする者であり、いま参考書を利用する便宜がないので、そういう研究はほかの方にやって戴くことにしました。皆さんが大きくなられたら、自分で研究してごらんになるのも大変結構です。ただ、私は、これらの昔ばなしの行われている民族の生活を多少知っていますので、その点に関する説明を加えて、お話が一そうわかり

やすくなるように努めました。外国の文学を読むときにはことにそうですが、このような昔ばなしを読むのにも、その民族の思想や生活を知らないと、十分理解することができません。民族は違っても同じ人間ですから物の考え方が似ているのは当然のことです。しかし、それと同時に、違った点も少なくありません。私たちは外国の文学や昔ばなしを読んでも、すべて日本式に理解しようとする癖がありますが、理想をいうと、これは根本的に改めなければならないことです。私たちとは違った物の考え方をする人たちがいるということを、小さい皆さんがよく諒解する、とすれば、それは本当によろこばしい事です。なぜなら、そういうことがよく理解されると、私たち自身の物の考え方を客観的に批判することができるようになり、私たちの習慣を改善して結局日本民族をよくすることができるからです。また、自分らばかりを基準にして考え、自分らの習慣と違っているものは何でも変で笑うべきものだと考えるような、排他的な独りよがりの考え方がうすらぐからです。外国人から見れば、私たちの習慣が変でおかしく見えるでしょう。その点がよくのみこめていると、外国人との交際が一そう円滑に行くわけです。

服部は「言語学を専攻とする者」であるという姿勢を貫き通す。そこで提案するのがフランスの言語学者メイエを踏まえた「系統に関する研究」であった。系統的な言語学と国際的な比較研究がどのように関われるのかという課題を提案したが、そこまでで止まってしまった。

各話の「解説」については、「10　蒙古の昔ばなし」から始めた。それは一九三五年の夏、満洲のホロンバイル（興安北省）に滞在中、蒙古の子供たちから直接蒙古語で聞き取ったものから翻訳したからであった。その後は最初に戻って、「1　ワッチルの冒険」から「9　山男とお爺さん」までを解説している。

やや特異なのは「附記」で、日本語の表記法についてかなり詳しく述べている点がある。現代仮名遣いそのものも変化してゆく時期であったが、それ以上に言い伝えられた昔話をどのように表記するかというのは、必ずしも自明なことではなかった。服部がこだわったのは終始一貫して言語の問題そのものであり、促音便の「っ」の表記はこのシリーズで初めて採用された。

一〇　イランとアフガニスタンで実際に聞いた昔話――『金の燭台』

小川亮作・河崎珪一共編『金の燭台―イラン・アフガニスタンの昔話―』は、先の『金と銀のさいころ―アルタイ系諸族の昔話―』と同じ一九四八年一一月に発行された。やはり再版は確認できていない。

それまで最初にあったような内容の文章が、なぜか、この本では「あとがき」になっている。いきなり「1　易者」から始まるのはいかにも不親切であり、何か事情があったのかもしれない。「あとがき」では、昔、イラン、アフガニスタンと国を呼ぶようになった由来、そして、その歴史と宗教を説明し、「かれらが外国の圧迫にもかかわらず、よく国を保っているのも、かれらのこうした如才のない世渡りのうまさと、そして生れつきの自尊心の強さによるものと思います」と結んだ。こうした内容から見ても、やはり、「まえがき」として置きたかった文章である。

初版で構成を示すと、次のようになる。

1　易者
2　ぼんやり蛇王子の話
3　小馬ケータスの話
4　ファーテメちゃん
5　禿頭と髯なしの話
6　金の燭台
7　利口者の托鉢僧（ダルウィシ）
8　百姓男と高利貸しの話
9　ファーイズの笛
10　亀の甲羅かぶりと狐
11　イスファハンの商人とこれに背いた妻の話
12　怪蛇ユーハー
解説

あとがき

監修者のことば　柳田国男・川端康成

これまでの「世界昔ばなし文庫」と違って、各話の解説は話末に入っている。例えば、「6　金の燭台」には、次のようにある。

ジン　魔精（ましょう）のことです。これは天使でもなく、人間でもなく、ちようどそのあいだぐらいのもので、魔力をそなえていて、よく猫だの羊だのに化けます。イラン人やアフガン人はこの魔精（ジン）につかまれることを非常に恐がつています。

これに似た話は「千一夜物語」にも出ています。日本にそつくり同じのはないが、部分的に似た話はあります。

こうして各話末に説明がある方が読者にとっては親切かもしれない。しかし、そのため、「解説」にはこうした説明はなく、「一、話の由来」「二、ペルシァおよびアフガニスタンという国」として概説を述べる。興味深いのは「一、話の由来」で、その冒頭に、次のような一節が見られる。

イラン（ペルシア）やアフガニスタンは大へん昔ばなしの多い国である。この地方は古来、文化の交流点に位（ママ）していましたので、インドやアラビヤをはじめ、世界の国ぐにから伝わつてきた昔ばなしも多いし、またイラン人（ペルシァ人）、アフガン人自身非常に空想的で、機智に富んだ国民でしたので、自らも多くの語りばなしを創作しました。これらの昔ばなしの中には、個人がつくつたり、翻訳したりした書かれたはなしもありますが、大部分は「ゲッセホーン」（話し手）とか「ナッカール」（語り手）とか呼ばれる人びとが、代だい口づてにうけ継いで、一般の人に話してきかせるもので、それがまた一ばん面白いのです。ところがこういう口づての昔ばなしは、なにぶん本に書かれたものでないので、同じ話でも地方によつてちがい、また話し手によつてちがいます。そして世の中が変るにつれて、古いものがだんだん忘れられて行く傾向もあるのです。それは大そう惜しいことだから、書きとめておこうというので、二、三のヨーロッパ人が、こういう口づてのイランやアフガニスタンの昔ばなしを集めて本にして出しました。またイラン人やアフガン人自身も、最近集めだしているようです。しかし、これまでに集められたものはほんの一部分で、まだまだ面白い話の大部分が、集められずにいます。

そして、イランの昔話集四冊、アフガニスタンの昔話集一冊を紹介するが、「この本に収めた十二のお話は私達二人が、イランやアフガニスタンできいた昔ばなしのうちでも一番有名な面白いものばかりです」とあるので、小川と河崎は実際に昔話を聞いてこれを書いたのである。初めの五話は河崎、残りの七話は小川が執筆したことも明らかにしている。語り手を認識し、さらに文献も把握した上で編まれた一冊であったということができる。

一一　世界平和とデンマーク・スウェーデンの昔話――『うたう木の葉』

石田英一郎著『うたう木の葉―デンマーク童話集―』は出版社を異にするが、「世界昔ばなし文庫」の流れで発行されたことはすでに述べたので、詳述しないことにする。

まず石田は「はしがき」で、日本と対比しながら、デンマークとスウェーデンを訪れて感じた「幸福な平和」について述べ、次のような指摘をした。

そこでこんどの戦争の後には、軍国主義にしつぱいして今日のみじめな有様におちいつた私ども日本人も、ふたたび立ちあがるためには、このデンマークやスウェーデンの歴史に学べ、という言葉を度たび耳にするようになりました。

一ばん大切なはじめての学校時代を、戦争という大きなわざわいにまきこまれたあなた方は、戦争がいかに悲惨でおろかしいものであるかが、身にしみておわかりになつたことでしよう。もし人間が本とうに他のけだものよりも一段と高いかしこい動物であるならば、こんなばかげた戦争に何百万人の人と人とが殺し合うようなまねはやめて、デンマークやスウェー

デンのような、平和でゆたかな生活を楽しむことができそうなものです。ところがこれがまた仲(ママ)なかむつかしい問題で、世界はもはや一つや二つの国だけで小さな平和境をつくることも、困難な有様になつてきました。原子時代といわれる今日、人間はなんとかして世界全体が戦争の惨害からまぬかれるみちを考えないと、ついにはおたがいに殺し合つて、みんながほろびてしまうかもしれません。どうすればすべての人類が平和にくらせるか――これはあなた方がこれから一生かかつて智恵をしぼり、努力を重ねなければならぬ大きな仕事です。デンマークやスウェーデンの歴史も、どうかこうした新らしい目で見なおして下さい。

その後ですぐ、「この本におさめたデンマークとスウェーデンの昔話は、以上のべたような問題と直接関係はありませんが、これらの国の人びとを知る上には役に立つものです」と、反転してしまう。しかし、先の『火の鳥―ロシヤの昔話―』の「はしがき」で述べたことを思えば、改めて「原子時代」の「平和」を考えるための昔話集として、これを位置づけたことは間違いない。

初版で構成を示すと、次のようになる。

はしがき　著者
人狼
ピンケルの冒険
三つの望み
南の湖(うみ)の娘
灰色の小馬
食わず女房
うたう木の葉
解説
監修者のことば　柳田国男・川端康成

「解説」では、「南の湖(うみ)の娘」「灰色の小馬」「食わず女房」がデンマークの昔話、「人狼」「ピンケルの冒険」「三つの望み」「うたう木の葉」がスウェーデンの昔話であることを明かす。副題は「デンマーク・スウェーデン童話集」とするべきだったのではないか。表題の「うたう木の葉」がスウェーデンの昔話であることは、「デンマーク童話集」と齟齬を生じている。

この「解説」の書き方は工夫があって、『火の鳥―ロシヤの昔話―』のような硬さはない。「末子の成功」「人狼」「トロール」「聖ヨハネの日」「聖ワルプルギスの日」「馬の首切り」「食わず女房」「うたう木の葉」「昔ばなしの結び」と続く。個別の話の解説よりも、その背景になる民俗を説明したり、昔話の構造に言及したり、さらには日本の昔話を具体的に引いたりしている。子供向きのわかりやすい解説になっているということができる。

一二　『世界の昔ばなし』と『世界民話全集』への展開

関敬吾と石田英一郎は、彰考書院と福村書店の「世界昔ばなし文庫」の二度の挫折にもめげず、世界の昔話の全体像を示すことへの執着を断ち切ることはなかった。これをさらに展開した挑戦が河出書房の『世界の昔ばなし』全二冊であった。この論述については次の機会に回すことにするが、得られた情報によって見通しだけは立てておくと、次のとおりになる。

・関敬吾・石田英一郎共編『世界の昔ばなし』河出書房、一九五〇年七月発行〔「監修者のことば」（柳田国男・川端康成）、フランス（佐藤正彰）、スエーデン（石田英一郎）、デンマーク（石田英一郎）、ドイツ（小滝穆）、イラン（河崎珪一・小川亮作）、インド（河田清史）、タイ（江尻英太郎）、アルタイ（服部四郎）、ロシア（石田英一郎）、中国（魚返善雄）、アイヌ（金田一京助・知里真志保）、日本（関敬吾）、「解説　この本を読む人々のために」（石田英一郎・関敬吾）〕（未見）

・関敬吾・石田英一郎共編『世界の昔ばなし　続』河出書房、一九五一年八月発行〔「監修者のことば」（柳田国男・川端康成）、フランス（佐藤正彰）、スエーデン（石田英一郎）、デンマーク（石田英一郎）、ドイツ（小滝穆）、イラン（河崎珪一・小川亮作）、アフガニスタン（小川亮作）、インド（河田清史）、タイ族（江尻英太郎）、ロシア（石田英一郎）、アルタ

イ族（服部四郎）、中国（魚返善雄）、アイヌ（金田一京助・知里真志保）、日本（関敬吾）、「解説　読者と父兄と先生がたに」（関敬吾）〕（未見）

内容から知られるように、この二冊は「世界昔ばなし文庫」からの抄録に増補して、まず一冊が出たが、これが好評で、さらに二冊目の「続」が出たと思われ、最初から二冊の予定ではなかったと考えられる。

この好評を受けて本格的に取り組んだのが河出書房の『世界民話全集』全一〇冊であった。これは、本扉の裏に、監修者として柳田国男・川端康成の名前を挙げることから「世界昔ばなし文庫」の継続という意図があったと知られる。しかし、「監修者のことば」はなく、名義上のことになってしまっている。

編集責任者として関敬吾・石田英一郎の名前を挙げることは、やはり「世界昔ばなし文庫」からの展開であることを明確に示す。しかも、この二人に加えて、新たに徳永康元・会田由の名前が見える。徳永康元（一九一二～二〇〇三）は言語学者・ハンガリー文学者、会田由（一九〇三～一九七一）はスペイン文学者であり、このシリーズを充実させるには的確な人選であったということができる。

このシリーズについても分析を展開したいが、手元に3・6・9の三冊しかなく、新型コロナウイルスの拡大によって図書館の閲覧が思うにまかせないまま時を過ごしてしまった。この論述についても次の機会に回すことにするが、得られた情報によって見通しだけは立てておきたい。このシリーズの全体像を巻数順に示してみると、次のとおりになる。

・訳者代表・会田由『世界民話全集1　南欧篇』河出書房、一九五四年四月発行〔イタリア（柏熊達生）、スペイン（会田由）、ポルトガル（星誠）〕（未見）

・訳者代表・未確認『世界民話全集2　北欧篇』河出書房、一九五四年？月発行〔スウェーデン（石田英一郎）、デンマーク（石田英一郎）、ノールウェー（山室静）、アイスランド（山室静）、フィンランド（桑木務）、ラップ（徳永康元）、バルト諸国（徳永康元）〕（未見）

・訳者代表・関敬吾『世界民話全集3　西欧篇』河出書房、一九五四年七月発行〔イングランド（久保寺逸彦）、スコットランド（久保寺逸彦）、アイルランド（久保寺逸彦）、フランス（小林正）、ベルギー（朝倉純孝）、オランダ（朝倉純孝）〕

・訳者代表・未確認『世界民話全集4　中欧篇』河出書房、一九五四年？月発行〔ドイツ（川端豊彦・小栗浩）、オーストリア（渡辺護）、スイス（渡辺護）、ハンガリヤ（徳永康元・佐藤純一）、ルーマニア（久保寺逸彦）、ジプシー（小栗浩）〕（未見）

・訳者代表・石田英一郎『世界民話全集5　東欧篇』河出書房、一九五四年九月発行〔ロシア（石田英一郎・石田布佐子）、コーカサス諸族（徳永康元・佐藤純一）、ブルガリア（吉成大志）、ポーランド（吉成大志）、チェコスロヴァキア（渡辺護）、ユーゴスラヴィア（渡辺護）、アルバニア（渡辺護）、ギリシャ（小栗浩）〕（未見）

・訳者代表・石田英一郎『世界民話全集6　近東篇』河出書房、一九五四年六月発行〔イラン（小川亮作・河崎珪一）、アフガニスタン（小川亮作）、イラク（前島信次）、シリア（前島信次）、アラビア（前島信次）、エジプト（前島信次）、トルコ（佐藤誠）〕

・訳者代表・関敬吾『世界民話全集7　東南アジア篇』河出書房、一九五四年？月発行〔インド（河田清史）、チベット（平川紀一）、ビルマ（平川紀一）、シャン（牧野巽・佐藤利子）、タイ（江尻英太郎）、アンナン（三根谷徹）〕（未見）

・訳者代表・徳永康元『世界民話全集8　北方アジア篇』河出書房、一九五四年？月発行〔アルタイ系諸族（服部四郎・佐藤誠）、ウラル系諸族（徳永康元・佐藤純一）、極北諸族（服部健）〕（未見）

・訳者代表・関敬吾『世界民話全集9　極東篇』河出書房、一九五四年五月発行〔日本（関敬吾）、琉球（金城朝永）、アイヌ（金田一京助・知里真志保）、中国（魚返善雄）、朝鮮（関敬吾）〕

・訳者代表・石田英一郎『世界民話全集10　太平洋諸島篇他』河出書房、一九五四年四月発行〔インドネシア（斎藤正雄）、太平洋（石田英一郎・石田布佐子）、北アメリカ（服部健）、ラテン・アメリカ（石田英一郎・石田布佐子）、アフリカ（石田英一郎・石田布佐子）〕（未見）

先の「世界昔ばなし文庫」との連続は明らかである。例えば、9の金田一京助・知里真志保の「アイヌ」の「〔北海道〕鬼鹿毛」「〔北海道〕流れて来た子ども」「〔北海道〕黄金の首飾り」「〔樺太〕サンナイペツの首領」「〔樺太〕サヌィペシのきょうだい」「〔樺太〕流れて来た母神」は、すべて『りくんべつの翁―アイヌの昔話―』にあった話である。ほかにも、「世界昔ばなし文庫」の江尻英太郎、服部四郎、河田清史、小川亮作、河崎珪一も含まれていて、今後精査する必要があるが、「世界昔ばなし文庫」からの抄録に増補して構成されている部分があると推測される。

それとともに、やや気になるのは「解説」である。見ることのできた3は関敬吾、6は石田英一郎、9は関敬吾（ただし、「中国のおはなし」は魚返善雄）が担当している。訳者代表が「解説」を書くという役割分担だったと思われるが、その内容は概説的であり、かつて石田が『火の鳥―ロシヤの昔話―』で示したような出典の記載まで入れたような専門的な内容は見られない。

加えて、例えば、アイヌ研究者である久保寺逸彦がイングランド、スコットランド、アイルランド、ルーマニアを担当しているというのは、違和感を拭うことができない。かつて「世界昔ばなし文庫」の「監修者のことば」に、「それぞれの国の文化をしらべていられる専門の学者にたのんで」とあった姿勢は、世界の昔話の全体像を示すことを優先したために後退したことは否定できない。

付記

本稿の執筆にあたり、東京学芸大学附属図書館の髙橋隆一郎さんのお世話になった。「世界昔ばなし文庫」は、単行本に先立って新聞への連載があったのではないかと思い出すが、今、資料を確認できない。『世界の昔ばなし』『世界民話全集』の詳細については、次の機会に改めて述べることにしたい。そうした検証を通して、植民地主義に支配された昔話集から、戦後どのように脱却を図ろうとしたのかをさらに明らかにしたい。

なお、国立国会図書館の検索によると、彰考書院版の七冊はプランゲ文庫（読み物）に所蔵されるので、検閲を受けていることが知られるが、『うたう木の葉―デンマーク童話集―』は含まれていない。この時期の出版として注意しておきたい。